

川端『眠れる美女』をめぐって——プルーストの 「眠る女」を視野におさめて——

吉川 佳英子

序

エロチシズムとデカダンスの香りが色濃く漂う昭和の名作『眠れる美女』は、1960年から1961年にかけて発表された中編小説で、川端康成が61歳の時に執筆した作品である。川端はその生い立ちからも、生涯、孤独を深く噛みしめる作家だった⁽¹⁾。そんな彼は、他者との人間的な交流や交感をむしろ回避することで、逆説的だが、心の平安が得られることを鋭敏に察知していたようだ。そして、『眠れる美女』や短編『片腕』といった作品の中に、そういった「精神の安逸」を皮肉なニュアンスをこめて書き込んでいる。我々は、川端も親しんでいたであろう同時代の作家プルーストの小説⁽²⁾における類似した場面を視野に収めながら、その傾向を確認するとともに、そういった平安が果たして孤独の十分な救済になり得ているかどうかを考察したい。

1. 川端『眠れる美女』をめぐって

まず、『眠れる美女』のあらすじを簡単に述べてみよう。主人公は67歳の江口⁽³⁾という男の老人だ。江口は年齢的にはすでに「老人」の域に入っても、まだ男としての機能を失ってはいない。ある日、江口は知人の紹介で「眠れる美女」の家の存在を知ることになる。「眠れる美女」の家とは、少女と共に夜を過ごすことが

出来る家だ⁽⁴⁾。共に夜を過ごせるといっても、見知らぬ少女たちの傍らでただ添い寝ができるというだけのことだ。少女たちは強い薬のために、一晩中ベッドで眠っていて、揺すったり叩いたりしても、決して起きることはない。老人たちは、これら少女たちを性の対象として眺めるが、彼らは大半が、もう男でなくなっているのだから、いわゆる「安心の出来るお客さま」として歓迎される。ただ、江口はまだ「男」でありながらこの家に足を踏み入れる。宿の女はそのことに気付かず、江口を喜んでもてなす。小説の中で、江口はこの家に計5回泊まり、計6人の少女と夜を共にする。眠っている少女たちは皆「きむすめ」、つまり処女なのだが、この家の掟として、接吻までは許されても処女を犯すことは禁制とされている⁽⁵⁾。部屋の枕元には睡眠薬と思われる白い錠剤が用意されていて、江口は毎回それを飲んで眠りに付き、翌朝に宿の女が起こしに来るまで少女の横で眠る。その時、江口は自分の娘や愛人、若い日に関係を持った女のことを思い出しては性の世界に浸るのだった。このような営みは、結局、一人の「眠れる美女」の突然の死によって打ち砕かれ、江口自身の死をも暗示する虚無的な結末を迎えることになる。

この小説においては、セックスが禁じられているために、妙に閉塞感に伴われたエロスが作品全体を取り巻いている。本来、性は自由や解放の象徴であるのに、それが作中で成就されることはない。従って、相互に交わされる人間的かつ根源的な感覚的コミュニケーションは無常にも回避され、それがために不完全燃焼のエロスは、救い難いほどに息苦しい。しかしながら、このシチュエーションは、矛盾するようだが、同時に奇妙な安逸へ我々を導きもする。

そもそも、眠っている女性は、そこに居るのに、そこに居ないと言えるだろうから、この隔たりが「他人を所有する」という不可能を、実は可能にさせている。自身の妄想によって、理想の女性像を目の前の少女に投影し、悦に入るのも良いし、眠る少女を媒介に、過去の女たちの甘いあるいは苦い思い出に身を任せるのも良い。ここでは、少女たちは実際、老人たちの妄想と追憶のために捧げられた生贄なのだ。

そんな中、67歳の江口は、10代の少女たちに性的興味を掻き立てられているという点では「少女への性的嗜好の強いタイプ」だと言えると思われるが、それでは、

成人の女性に対して彼はどのような感覚を持っているのだろうか。例えば、江口が若いときに出会った上司の夫人については「夫人の媚薬じみた香水の匂いがにわかに強く鼻に來たものだった。…きたなく感じたものだった⁽⁶⁾」とある。性への欲望の強い女に対して、「きたない」と感じてしまう江口は、それゆえに、無知で純潔な少女の性を嗜好するようだ。また、宿の女に「妙だな。君も女の本性をあらわして來たってわけ…？⁽⁷⁾」という場面があるが、ここでいう「女」の本性というのは、浮気をする心の動きを指し、それをネガティブに表現しているところから考えて、主人公江口は、いわゆる大人の女性と正面切って付き合うことを苦手とするらしく、従って、この宿では、いわば成熟した大人の人間的な心情の交わりが免除され、関係性が、ただ生物としての男女の関係にのみ還元されているために、江口にとっては、むしろ安堵を感じさえする好都合な環境であると言える。こういったことにより、この小説は閉塞感の伴うエロスに満ちているけれども、不思議に安逸な印象を読者に与える結果となっている。

2. ブルースト『失われた時を求めて』の「囚われの女」をめぐる

ところで、眠っている女性を眺めることに至福の時を見出す主人公の話には、実は先行する小説がある。1920年に東京帝国大学文学部英文学科に入学し、後に国文学科へ移った川端は、フロバール等のフランス文学を好んで読んでいたが、1923年に発表されたブルーストの『失われた時を求めて』の「囚われの女」⁽⁸⁾の中の有名なくだり、すなわち恋人アルベルチヌの眠りの場面をおそらく心得ていただろうと思われる。その場面を少し引用してみよう。

Continuant à entendre, à recueillir d'instant en instant, le murmure apaisant comme une imperceptible brise, de sa pure halaine, c'était toute une existence physiologique qui était devant moi, à moi ; aussi longtemps que je restais jadis couché sur la plage, au clair de lune, je serais resté là à la regarder, à l'écouter.

Quelquefois on eût dit que la mer devenait grosse, que la tempête se faisait sentir jusque dans la baie, et je me mettais comme elle à écouter le grondement de son souffle qui ronflait ⁽⁹⁾.

相手の女性は眠っているのだから、人物描写は結局のところ、寢息や寝癖や寝言をとおした肉体描写に限られるが、並べてみると、ブルーストと川端の描写はこの他、似通っているようだ。川端の『眠れる美女』の一場面も引いてみよう。

「[...]大粒の歯なのにその八重歯は小さい。娘の息がかかって来なければ、江口はその八重歯のあたりに接吻したかもしれない。しかし娘の濃い息は老人の眠りをさまたげるので寝返りした。それでも娘の息は江口の首筋にあたった。いびきではないけれども、声のあるような寝息だった。江口は首をすくめかげんに、白い娘の頬に額を寄せた。⁽¹⁰⁾」

ブルーストと川端のいずれの引用にも、眠る女の「寢息」や「いびき」が細やかな筆致で描写されていて、睡眠という本来、動きの乏しい場面にも独特の立体感を与えられている。

先に、「眠っている女性は、そこに居るのに、そこに居ない」と述べたが、ブルーストにあつては、眠る恋人は、「花をつけた細長い茎 ⁽¹¹⁾」にたとえられる。

[...] je trouvais Albertine endormie et ne la réveillais pas. Etendue de la tête aux pieds sur mon lit, dans une attitude d'un naturel qu'on n'aurait pu inventer, je lui trouvais l'air d'une longue tige en fleur qu'on aurait disposée là ; et c'était ainsi en effet : le pouvoir de rêver que je n'avais qu'en son absence, je le retrouvais à ces instants auprès d'elle, comme si en dormant elle était devenue une plante⁽¹²⁾.

評論家クウルティウスによると、ブルーストはフローラ系の作家で、人間を、さながら意志をもたない植物のようにとらえて描写する。例えばアルベルチヌとパリで再会した主人公は、バルベックでの時と違って首尾よく彼女にキスする機会を得るが、その場面でも彼女は花にたとえられる。

Enfin, n'y ayant pas réussi à Balbec, je vais savoir le goût de la rose inconnue que sont les joues d'Albertine [...] ⁽¹³⁾ .

ここでアルベルチヌの頬を薔薇の味と表現することで、この場面におけるエロスはより一層、強調される。このキスの場面以外でもアルベルチヌはしばしば薔薇の花に例えられる傾向があるのだが、他に、オデットはキク、ラン、カトレヤで表わされ、ゲルマント夫人はツルニチソウ、ステルマリヤ嬢はスイレン、ヴァントゥイユ嬢はさんざし、ラッシュェルは桜と梨の花など、このたぐいの例は枚挙にいとまがない。また、有名な「ソドムとゴモラ」の冒頭部では男たちの愛のやりとりは植物の受粉の様子を用いて表現される⁽¹⁴⁾。同性愛者シャルリュス達の出会いは、フランス不条理演劇の劇作家サミュエル・ベケットの『ブルースト論』の中では以下のように説明される。

[...] 花や草木は、意識された意志をもたない。それらは、生殖器官をさらけ出したまま、恥じることを知らない。ある意味で、ブルーストの描く男女もまた、そうである。彼らは、不純な世界の限られた範囲内で、怪奇な、あらかじめ定められた活動力をもって働く、おのれの意志の生贄なのである。だが、恥じることを知らぬ。善悪は問題にならない。同性愛は、けっして悪とは呼ばれない⁽¹⁵⁾。

さながら知性を持たない植物のように、感受性に忠実な彼の登場人物たちは、従って「性」の境界を越える困難を知らず、もとより性的な葛藤を経験することもないので恥や罪意識とは無縁といえる。アルベルチヌの眠りに話を戻すならば、この

花に例えられる登場人物はしかも、眠っていて意識がないのであるから、彼女は実際、現実的な一人の女ではなく、花としての女であり、従って人間的肉体を持った女のように彼をおびやかすこともない。

En fermant les yeux, en perdant la conscience, Albertine avait dépouillé, l'un après l'autre, ses différents caractères d'humanité qui m'avaient déçu depuis le jour où j'avais fait sa connaissance. Elle n'était plus animée que de la vie inconsciente des végétaux, des arbres, vie plus différente de la mienne, plus étrange et qui cependant m'appartenait davantage ⁽¹⁶⁾ .

恋人が起きている間、語り手はずっと相手の性的放埒の兆候に嫉妬を感じ、なかなか自分の思いどおりにできなかった。しかし、こうして対象が眠ってしまうと、初めて彼女をようやく我が物にすることができ、心の安穩を得られる。目覚めて活動している時、他者はつねに他者であって、こちらの思うとおりの人間であってはいくれない。けれども眠っている間だけは、彼女は植物のようになって、こちらの思いどおりの人間として想像することができ、所有できる。彼女が彼女でありながら、目を閉じているからで、つまり意識的に嘘をついたり、ごまかしたりする存在ではなくなる。また、眠る彼女は目の前にいながら意識は不在になるので、目の前にない対象は人の想像力を大いに刺激するのである。ブルーストのように他人と交流することに悲観的である者にとっては、恋人アルベルチヌの眠りは、確かに貴重な至福の時なのだ ⁽¹⁷⁾。ブルーストはそのようなときに「ある程度まで愛の可能性を実現する ⁽¹⁸⁾」と言う。このアルベルチヌの眠りは、ちょうど川端が描く葉で眠らされている少女たちのように深くて、少しくらい腕や脚を動かしても起きることもないから、話者は傍らで、アルベルチヌの姿をいつまでも飽かず眺め続けられる。

しかし、所詮これは所有の幻想にすぎない。意識を失って眠るアルベルチヌもいずれは目覚めるから、そうすれば不在の彼女に向けられた話者の想像力も、も

はや彼女を対象にするわけにはいかなくなる。こうして語り手はふたたび、疑惑と嫉妬にさいなまれる生活が始まることになるのだ。

それにしても、人間の肉体を介してのコミュニケーションの全を理想としつつ、その満足が得られるのは、睡眠時といういわば意識のレベルにおける相手の不在状態の時のみに限られるというのは、何とも残酷な皮肉と言うべきだろう。

川端の『眠れる美女』の中で、木賀という老人は「眠らせられた女のそばにいる時だけが、自分で生き生きしていられる⁽¹⁹⁾」と、江口に告白するが、根源的なレベルでのコミュニケーションを避けた結果、得られる少女への愛着は、本来の性のありようを思い浮かべるなら、確かにアイロニーに満ちていると言えるだろう。人間的交感を欠いた設定であるからこそ得られる至福とやすらぎは、性愛の全うに対する虚しい挑戦の企てでもあるのだろうか。

3. 川端の短編『片腕』をめぐって

この深い層における人間の交流、交感という観点に立つなら、『眠れる美女』に続いて書かれた川端の『片腕』という短編は、実にユニークでまた、さらに鋭い問題提起を我々に課している。1963年から1964年にかけて発表されたこのシュールとも言える作品は、完成度から言っても他に類を見ないものだろう。簡単にあらすじを紹介しよう。

主人公である「私」は、ある娘から片腕をひと晩借りることになる。娘はやすやすと「私」に、美しい肩のまるみごと、右腕をはずしてくれるが、その時「ひと晩だけれど、このお方のものになるのよ。⁽²⁰⁾」と腕に言いきかせる。そして「お持ち帰りになったら、あたしの右腕を、あなたの右腕と、つけ替えてごらんになるように。⁽²¹⁾」と「私」に指示する。アパートの部屋に帰り着いた「私」は、右腕との時間を過ごすが、取り替えられたために、一個の生命体となった彼女の片腕は、体温を保ちつつ指や肌は繊細な動きをし、さらに対話まで始める。作中で「自分は遠くにあるのよ。⁽²²⁾」とその片腕はなぐさめの歌のように繰り返す。それでも結

局、「私」は自分の片腕を発作的に取り戻してしまうので、その反動で娘の腕は跳ねのけられるが、やがて丁重に拾い上げられ、「私」の胸にしっかり、いだかれる。

さて、この短編小説では、先の『眠れる美女』とちがって、明確な会話が交わされるし、人間的な心情の交流、感応もしっかり描かれた作品と言える。ただし、相手は他でもない「片腕」なのだ。片腕であるからこそ実現し得た交流とも言えよう。本来、ここで繰り広げられているようなコミュニケーションは、その相手としては当然、女性の存在が想定されるが、どういうわけか、ここでは女性の体の一部である「片腕」なのだ。女性の片腕とは、もちろん女性自体の濃密な象徴の役割を果たしているが、そもそも片腕をはずしてもらって持ち帰り、その片腕と対話するなどといった設定は、それ自体、大いにコミカルな効果を上げている。加えて、女性とは十分なコミュニケーションがはかれないけれども、片腕となれば人間的な深い交流が成り立つというのは、人間性に対する大いなる皮肉と言えるだろう。先の『眠れる美女』においても、人間的交流をめぐるアイロニーが暗示されている旨を指摘したが、小説『片腕』においては、さらにそれを一歩進めた形での痛烈な皮肉が作品全体にこめられているようだ。そしてそれは、片腕ではなく、女性という他者と、実は築きたいと強く願っている関係に裏打ちされているのだ。

4. 『眠れる美女』の「死」をめぐって

さて、ここで再び『眠れる美女』にもどり、最終場面の「死」の問題について考えてみよう。あらすじで示したように、江口の逸楽は、突然の「眠れる美女」の死によって打ち碎かれる。死を前に驚愕する江口の声には、「憤怒と言っても、臆病と恐怖が加わって⁽²³⁾」いる。もちろん、いきなり人の死に直面して、恐怖におののいているのだけれども、作家三島由紀夫に言わせると、この場面は「江口自身の死をも暗示するもっとひろい、もっと社会的な、もっとのがれようのない「死の舞踏」へと開かれている⁽²⁴⁾」ようだ。三島は小説の発表当時、これを絶賛したことで知られているが、このクライマックスは確かに深い虚無にさらされている。

先に引用したブルーストの、恋人が眠るシーンにおいては、しばらくすると恋人は目を覚ますわけだから、その瞬間に語り手は望むと望まないに関わらず、他者としての彼女に向き合わねばならない。もちろん我々はけっしてアルベルチヌの正体を知ることがない。というのも、すべては語り手の主観を通して、語り手のイメージによって、書かれているのであり、アルベルチヌとは結局のところ、語り手によって作られた女であり「花」の存在なのである。

しかし、川端の『眠れる美女』では、娘は強い薬のせいを目を覚まさないのだから、こういった営みの平穏が崩されるのは、人の「死」といった破壊的な出来事によってのみであって、こうして主人公は現実呼びさまされるのだ。

現実世界の「孤独」に対して敏感過ぎる者にとっては、このような宿はあるいは理想の場かも知れない。実際、江口は次のように告白している。「[……]時には孤独の空虚、寂寞の厭世におちこむ。この家などは得がたい死場所ではないだろうか。[……]たとえば今夜のように二人の若い女のなかに眠り死んでいれば、老残の身の本望ではないのか。⁽²⁵⁾」と。確かにこの宿は、訪れる老人が急死を遂げたり、江口の夢には畸形の赤ん坊が現れたり、つねに「死」を思わせる不吉な空気が漂っているが、同時に「死」へのある意味で、甘美な誘惑の空気も感じられる。ただ、この宿が拠って立つ基盤は極めて弱くて危ういものである。人間の欲望やエロスに半ば逆らった格好の企てで、魅力的だが挑戦的とも言える営みは、孤独者の理想の楽園を存続させるには危なっかしい。実際、ここで得られる安逸というのは、いつ消えるとも知れない、はかない性格のものなのだ。孤独者が一瞬の輝きだけでも良いからと儚い夢としての「平安」を希求するならいざ知らず、そのような脆い輝きだけでは真の救済たり得ないとするなら、やはりここでの精神の救済は不十分であると判断できるだろう。性の賛美に背を向けることで、平安を手に入れようとした皮肉を帯びた試みは、その報いとして、うたかたの安らぎに甘んじることを宿命として課せられてしまったのだろう。

我々は、第一章において、川端の『眠れる美女』の中では、相互に交わされる人間的かつ根源的な感覚的コミュニケーションが回避されていることを確認した。そのために、この小説は閉塞感の伴うエロスが満ちているが、同時に奇妙な安逸へ我々を導きもする。続く第二章においては、ブルーストの『失われた時を求めて』の「囚われの女」の中の恋人アルベルチヌの眠りの場面を取り上げ、『眠れる美女』との類似を指摘しながら、理想とする人間どうしの交感、相手が眠っていていわば意識のレベルにおいて相手が不在の状態の時のみに「他人を所有する」ということがはじめて可能になることに言及した。そして第三章では、川端の『片腕』を取り上げ、人間的交流をめぐる痛烈なアイロニーが作品全体にこめられていることを確認し、第四章では『眠れる美女』の「死」の場面をとおして、ここで語られる「安逸」が、作者も含めた孤独者の精神の救済になり得ているかどうかを考察し、その結果、救済のためには、得られる心の平安が余りにも脆くてあやういものであることを確認した。他者との交流、交感の幸福は、我々の理想であり続けるようだ。

注

Abréviation :

R.T.P. : A la recherche du temps perdu, édition publiée sous la direction de J.-Y. Tadié, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1987 à 1989.

- (1) 川端は 1899 年生まれだが、2 歳で父親、3 歳で母親を亡くした。
- (2) ブルースト 2007
- (3) 三田英彬は「『眠れる美女』の執筆動機」(1999)の中で能の「江口」に言及
- (4) 山中正樹『『眠れる美女』における密室の機能』(1994)を参照
- (5) 鶴田欣也は『『眠れる美女』』(1987)の中で「禁制」について言及
- (6) 川端 2008 25 頁
- (7) 同 81 頁

(8) タディエ 2001 377-379 頁

(9) *R.T.P., t.III, p.581*

ブルースト 2007 141-142 頁 「[...]彼女の清らかな寝息、あるかないかの微風のように気持を鎮めるこのつぶやきを刻々に聞き、刻々に心に留めていると、生理的な一個の全存在が私の目の前にあり、私のものとなるのだった。かつて月光を浴びた浜辺にじっと寝そべっていたように、私はできることならいつまでも彼女の姿を眺め、彼女の声に耳を傾けていたかった。とどこき海が荒れ、あたかも入江のなかにまで嵐が感じられるとでもいったときがあると、私はその入江のように、風の唸りにも似た彼女のいびきに聴き入るのであった。」

(10) 川端 2008 112 頁

(11) ブルースト 2007 135 頁

(12) *R.T.P., t.III, p.578*

ブルースト 2007 135 頁 「[...] 私はそうしたアルベルチヌスを起こそうとしなかった。故意にそんな姿勢をとろうと思ってもとれないような自然な姿勢で、ながながと私のベッドに横たわっている彼女は、花をつけた細長い茎をそこにおいたように見えた、そして実際そのとおりだった。こんなとき、あたかも彼女が眠ったまま植物に変わってしまったかのように、私は彼女の不在のときでなければ持ちえない夢見る力を、彼女のかたわらにいながら取りもどすのだった。」

(13) *R.T.P., t.II, p.659*

ブルースト 2006 103 頁 「いよいよだぞ。バルベックではうまくいかなかったけれど、これからアルベルチヌスの頬という、未知の薔薇の味を知ることになるんだ。[...]」。

(14) ブルースト 2006 60 頁

(15) ベケット 1999 106-107 頁

(16) *R.T.P., t.III, p.578*

ブルースト 2007 135-136 頁 「目を閉じ意識を失ってゆくにつれて、アルベルチヌスは、彼女を知った最初の日から私に幻滅を味わわせたあのさまざまな人間的性格を一つずつ脱ぎ捨てていた。もはや彼女は草や木の無意識の生命、私の生命とはいっそうかけ離れた、異様な、にもかかわらずいっそう私のものとなった生命によって生きているにすぎない。」

(17) 鈴木 2002 178-188 頁

(18) プルースト 2007 135 頁

(19) 川端 2008 20 頁

(20) 川端 2008 120 頁

(21) 同上

(22) 同 130 頁

(23) 川端 2008 116 頁

(24) 同 214 頁

(25) 同 109 頁

参考文献

兵藤正之助 1987 「川端康成論—「眠れる美女」、「魔界」—」『関東学院大学文学』

川端康成 2008 『眠れる美女』 新潮社

川端康成 2008 『片腕』 新潮社

川端康成 1980—1981 『川端康成全集』 新潮社

ミッシェル＝チエリ、F 2002 『ブルースト博物館』 保苅瑞穂訳 筑摩書房

サミュエル・ベケット 1999 『ブルースト全集別巻』『ブルースト論』筑摩書房

三島由紀夫 2008 「『眠れる美女』解説」 新潮社

三田英彬 1999 「『眠れる美女』の執筆動機」『反近代の文学 泉鏡花・川端康成』

大久保喬樹 1975 「後期川端康成作品の二相 (2) 「片腕」」『東京女子大学論集』

プルースト、M 2006 『失われた時を求めて6』 鈴木道彦訳 集英社

プルースト、M 2007 『失われた時を求めて9』 鈴木道彦訳 集英社

鈴木道彦 2002 『ブルーストを読む』 集英社

タディエ、J 2001 『評伝プルースト上・下』 吉川一義訳 筑摩書房

高橋真理 1995 「『眠れる美女』論」『日本文学』

鶴田欣也 1987 「『眠れる美女』」『比較文学研究』

海野弘 2002 『ブルーストの部屋 上・下』 中公文庫

山中正樹 1994 「『眠れる美女』における密室の機能」『名古屋近代文学研究』

吉川佳英子 1998 *Les Cambremer dans A la recherche du temps perdu* 創元社

(京都造形芸術大学准教授)